
真・恋姫†無双～平成の世から来た者～

光秀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫十無双～平成の世から来た者～

【NZコード】

N8479Z

【作者名】

光秀

【あらすじ】

平成の世から恋姫の世界へと降り立った一人の自衛官。この者が織り成す新たな外史の物語。

タイムスリップ（前書き）

これからこの作品を連載させていただく『光秀』です。

確認はしておりますが多少の誤字・脱字等があるかもしれません。
それも含め批判、感想、アドバイス等ありましたら言つてやつてください。

目指すは完結！

これからこの作品を読んでいただく皆様と長く付き合つていけることを願います。

タイムスリップ

俺は荒野の真ん中に一人立っていた。

まわりはまだ明るく少し暖かい。

東から吹く風が俺の長い髪をたなびかせる。

「此処何処だよ？」

思わずそんな声がこぼれる。

まさかこんな所にいるとは……。たしか俺はさつきまで教官に射撃の訓練を受けていたはずだったんだが。

おそらくといふかまあ間違いなく此処は日本じゃないな。こんな地平線が日本にあるはずはないし。

俺は今の状況にかなり困惑していた。

「とりあえず歩くかな。人に会えればどうにかなるだろ」

「どうやつて俺は歩き出した。特にこれといった目的地もないまま……」

「なんだあれは？」

俺の百メートルぐらい先にはドラマで見るようなカツアゲのシーンが繰り広げられていた。

目を細めてみたところビビッド一人の女性が三人の男共に絡まれているようだった。

俺も普通の人間のためこんな状況を見ればほっておける筈がなかつた。

「おーーーお前！」

「ああー！？」

急いでかけよった俺の目の前には左からチビ、長身、デブの順に黄色い服を着た男が立っている。この格好を見た俺はますますここが日本ではないと実感させられる。

おつと。こんな事を考えてこる場合じゃないんだ。

「死にてえのか!? ああ!?

いかにも悪者ですと言わんばかりの罵声を俺に浴びせてくる。

シュツ!

卷之二

その声とともに長身の男は自らの腹を抱え、その場に蹲つた。その様子を見たチビとテグはあまりの速さに何が起つたのか分かつていなかつた。

なぜ長身が地面に蹲つて いるかと いうと それは俺がこいつの腹に正拳突きをくらわしたからだ。

一時期は十年に一度の逸材などともてはやされていたがそれは昔の事である。

「十数える間にこの場を立ち去れ。…………いち！」

その掛け声とともにテヅが長身を背負いチビと一緒に逃げていった。

そして俺は振り返り、さっきまで絡まれていた女性へと声を掛ける。

「大丈夫でしたか？」

「はい。助けていただき有難うござります」

その女性は俺より身長が少し低く、スラッシュした印象を覚えた。髪や眉が白くそれに合わせたのか自らの格好も白い装束を身に纏っていた。

それにも整った顔立ちをしてくる。

「いえいえ。礼には及びませんよ。あつ、でも一つだけお聞きしてもよろしいでしょうか？」

「はい。私が分かる」としたら何でもお聞きください

「じゃあ……此処は何処ですか？」

その質問をぶつけると女性は少し不思議そうにしていた。が、少しうると答えは返ってきた。

「此処は荊州南郡にあります枝江県です」

俺はその返答に少し眉をしかめた。

「少し待つていただけますか？」

「はー……」

俺は少し考えを纏める。

荊州だと? ということは此処は中国か? いやしかしこの人人が適当なことを言っているという事も。

…こやないな。

わざきの男どもやうの辺り一面に広がる荒野を田の前にして俺はその言葉が事実としか思えなかつた。

そんな俺に一つの単語が思い浮かぶ。

タイムスリップ

もつもつ考えるしかこの状況に説明がつかなかつた。

でも俺には何も変わつた事は無かつた。

俺にはこの不思議な状況に陥る前の記憶は鮮明に残つてゐるがこれといつてタイムスリップに繋がると思えるよつた出来事は一つも無かつた。

そもそもタイムスリップってこんなに何の前触れもなくおとずれるものなのかな。

「どうかなさいましたか？」

真剣な顔で真剣に悩んでいる俺を見かねたのか女性はさう一言声を掛けてくれた。

「いや。教えて貰ださつ有難うございました」

そつ言つと俺は踵を返しその女性の前から立ち去つとした。

「待つてくださいー。」

俺は後ろを振り返る。

「何処か行く当てがおありますか？」

「いえ、特には」

俺はそう返事をする。

「もしよろしければ私の屋敷に泊りにならませんか？」

女性は淡々とした口調でそう言った。この申し出は俺にとっては願つたり叶つたりであった。が、俺はそれを断つた。

「本当に気にしていただきかないで結構ですから」

俺は軽く微笑みそう言つ。だが彼女は納得していない様子だった。

「それでは私の気持ちが済まないんです！！」

彼女は強い口調でそう言つた。その彼女の剣幕と粘りに負けた俺は頷いた。

「それでは」「厚意に甘えさせていただきます

俺は頭を下げた。

「頭を上げてください。本来なら」ひがが頭を下げなければならぬのですから」

そう言つと彼女は深く頭を下げた。

そして頭を上げた彼女は自らの名を名乗つた。
だが俺はその名に驚きを隠せなかつた。

「私の『馬良』と申します。真名は『魅面』（みおん）です。助けてくださいた貴方にならこの名を預けれます」

「……」

もしかして、

「馬良…………もしや子を『李常』とこいつではないだらつか？」

俺はおそれる馬良と並ぶ女性に尋ねた。もし俺の考えが正しければこの女性さうの質問にイエスと答える筈だ。

そしてそれが意味するのは……

「はい。しかしながら私の事を？」

馬良と並ぶ女性

見渡す限りの荒野

荊州南郡、枝江県

黄巾を纏つた男共

タイムスリップ

多少の違ひはあれどこのワードから導き出される答へは一つしかない。

「三國志……」

「えつ？」

此処は三国志の時代なんだ。

俺は表情こじて出さなかつたが確信を持つたその考えに驚いている。

黄巾の男。これが黄巾党の奴らなら今は後漢末期ということになる。それに俺の目の前にいる女性、性別は違つが馬良と名乗つている。彼女が馬良ならば彼女の眉が白いのにも合点がいった。

「はあ～」

頭をくしゃくしゃ掻きながら俺は溜息をついた。
膨大な情報量に今にも頭がパンクしそうだった。

なぜ馬良が襄陽郡ではなく此処にいるのか、なぜ女あのが、などの疑問はまた今度考えることにした。

今考えても思考が追いつかない。

俺は一つ大きな深呼吸をして馬良に言った。

「すまなかつた。色々と考える事があつたものでな。俺の名は『姜維』字は『伯約』だ。これからよろしく頼む」

俺はひとまずそつ名乗つた。これが三国志の時代ならば俺の本名は不自然だと思ったからだ。

「あと教えてほしいのだが真名つていうのはなんなんだ？」

俺はこの真名とこののに聞き覚えがなかつた。

「不思議な事を言つのですね。真名つていうのは心を許した者にしか教えてはならない神聖な名。人によって価値観は違つと思ひます。が私はそのように認識しております」

この時代にはそんなものがあつたんだな。

馬良、いや『魅音』が俺に真名を預けたとこにはやつそのままの言葉通り俺に心を許したとこ事なのだろう。

「やつか。じゃあ俺も真名を預けるよ『政義』（ませよし）ついていふんだ」

魅音は俺が真名を教えると少し驚いていた。

「真名を預けていただけるとほ嬉しいです。これからよろしくお願ひしますね」

「ああ」

俺は微笑み手を差し出す。すると魅音も微笑みながら俺の手を握り締める。

この時代にタイムスリップ?してどうなるか分からなかつたがひと

まず、のたれ死ぬことは無やうだ。

俺は安堵しつつ魅音の屋敷へと歩みを進めた。

タイムスリップ（後書き）

「馬氏の五常白眉もつとも良し」といわれる通り馬良は優秀な馬五人兄弟のなかでも特に秀でていたと言われます。

最初なので次も近々更新したいと思っています。

天の御使いとして（前書き）

連日の更新となります。

今回もうまく書けているか不安です。

天の御使いとして

俺と魅音は帰路についていた。帰る当てなどない俺は厚意により魅音の屋敷に泊まらせてもらう事となっていた。

日も傾き始め、辺りもだんだん薄暗くなり始めていた。

「政義はなんでそんな格好をしていらっしゃるのですか？」

魅音は不意にそう言つた。

「…ええとだな……」

俺は返答に困つた。

魅音がそう言うのも無理は無い。俺は現在タイムスリップ直前に着用していた迷彩服を着ている。それはこの時代の者から見ればかなり異様であった。

そんな感じで俺が答えも出せないままでいると……

「もしかして天の御使いさまですか？！」

何かハツと思い出したかと思うとそれまで冷静沈着なイメージだった魅音とはうつて変わり子供のように嬉しそうな顔でそう言った。本人は結構興奮気味である。

「天の御使い？」

「はい。今じゃ大陸はその噂で持ちきりですよ！なんでも管路なる占い師がこの地に乱世を終わらせる救世主が降り立つて占つたのが始まりでしてね！」

その後もしばらく魅音は天の御使いについて熱く語っていた。

……天の御使いか……。

多少乱世を終わらせるなんていうハードルの高いものになってしまふがこの状況じゃ仕方無いだろう。嘘も方便つていうしな。

「魅音。実は俺天の御使いなんだ」

あれ？もしかして嘘だつてばれたか？

しかしそんな俺の不安も杞憂で終わつた。

「えつー…本当に…やつぱり…ううだと想つたんですよ」

俺はそんな魅音の返答に女堵の溜息をつく。

魅音はそわそわした様子で俺を見ていた。その眼はさつきまでのよ
うな眼では無く俺に対しての憧れがこもった眼だった。

まだ魅音の興奮はおさまらない。

「魅音。落ち着け」

俺がそう一言やせやくような小さな声で言つと魅音は顔を真つ赤に
した。

「すいません。少し乱れてしまいまして。私そいつた興味のある
事ですと興奮してしまつて」

冷静な口調へと戻つてしまつたが髪をかまつたり目が泳いでいるあたり
を見るとまだ動搖しているように思えた。

そして魅音はひとつ大きく深呼吸をして言つた。

「それで興味ついでこもつーつを尋ねしたいんですか？」

魅音は上目遣いで俺にそう言った。その顔を見た俺は思わず後ずさりしてしまう。

「えっええ。いいですよ

「えっとですね。その腰についている黒光りしている物はなんですか？」

そう言いながら魅音が指した物は俺の腰についているホルスターに入っている拳銃だった。

「ああこれか？」

俺はホルスターから拳銃を抜くと撃つ構えをとる。

「これは拳銃といいまして、そうですな……天の世界の武器なんです」

「これが？」

魅音はさも不思議そうに拳銃を見つめている。

「どうやって使つんですか？」

魅音はまた目をキラキラさせ俺を見ている。

そうだな。天の御使いと証明するためにももつたいないが一発打つとくか。

そして俺は再び拳銃を構える。

「魅音、耳塞いどいたほうがいいぞ」

「はい……」

魅音は両手で耳を塞いだ。

俺は田の前に広がる荒野へと引き金を引く。

バンッ!!

その銃声は一瞬のうちに消え去った。

「…………」

魅音は両手で耳を塞いでまま突っ立っていた。

まさか気絶したとか言つなよ？

「おい魅音大丈夫か？」

俺は魅音の肩を揺すりながら言つた。

「…………凄いですね…………あまりにも凄かつたので言葉を失つてしましました。しかしこれで貴方が天の御使いであると確信しました。申し訳ないことに正直れつかまでは半信半疑だったんです」

「いいですよ」

まあ拳銃を撃つて見せたのもそのためなので信用してくれたのなら言つ事無しだ。今思えばあながち天の世界から来た天の御使いつつのも嘘つていう訳でもないしな。

「それよりまわりもだいぶ暗いですしさきを急いでうか？屋敷つていのはもう少ししなんでしょう？」

「ああ、はい。もう少しです」

そして俺たちは少し歩くペードを速くした。

俺たちは街へとついた。魅音の話によるとここは江陵らしい。といふことは太守は劉表か。

「どうぞ」

そうして俺が案内されたのは馬良の屋敷の一室だった。中は結構広く、おそらく十一畳くらいあるのではないだろうか？

「しばらくしたらお呼びしますので」

「有難う」

魅音は軽く微笑み会釈をすると部屋を出ていった。

俺が案内されたのは城内にある玉座の間だった。そこには俺より身

その後寝台に腰を下ろした俺はしばらく馬良がなぜ女なのか、やタ
イムスリップの理由などを考えていたがろくな答えは浮かばなかつ
た。

すると部屋に魅音がはいつてきた。

「政義さんに会わせたい人がいます」

そう一言だけ告げられた俺は魅音に案内されるがままについでいつ
た。

長が高く水色の鎧を纏っている女性がいた。前髪はカチューシャのよつなものであげてある。ちなみにそのカチューシャも水色だ。

周りには何人もの兵士が武装して立っていた。俺を警戒してのことだらう。

最初に口を開いたのはその水色の鎧を身に纏っている女性だつた。

「あたしは江陵太守『劉表』だ。そこの変な奴、名乗れ」

俺を指さしながら劉表と名乗る女性は言つた。

俺は田を疑つた。まさか馬良だけでなく劉表までもが女性だとは。だがまあそのことは一度保留にしておこう。

「俺の名は『姜維』字は『伯約』です」

俺は劉表の眼を見て言つた。

「なかなか良い田をしてるじゃねえか!」

劉表は笑いながらさりげなく言つた。そして俺の田の前まで歩み寄つてくれる。

そしてすぐに俺の横にいた魅音の方を向いてこう言つた。

「」こつが魅音の言つてた天の御使ことやらか?」

「はい。『木燕』(やなぎさん) わあ。」Jの方がさうです」

そして劉表は俺を足の先から頭のてっぺんまで見終わると言つた。

「採用ー明日からあたしに仕えなー。」

そして俺の肩をポンと叩くと部屋を出て行つてしまつた。

俺は魅音の方を見て言つた。

「どうこつじだ?」

「実は政義に才燕さま、えつと劉表さまに仕えて欲しくてさつき進言してたんですね。お節介でしたでしょつか?」

「いやそんな事は……」

さつき俺が部屋で待つてゐる間に魅音は俺の代わりに就職活動をしてくれていたのか。

「よかつたあ」

魅音は満面の笑みでそつと言つた。

そんなこんなで『天の御使い』といつ立場と『職』を手に入れた俺

はあまりにも出来すぎている事に内心驚いていた。

タイムスリップしてから僅か一日の出来事だったが正直まだこの時代の事もろくに分からぬしかなり戸惑っている。

だが帰る方法が分からぬ以上はとりあえずこのままでいようと思つてゐる。

そして自室へと戻りしばしの睡眠へとついた。

天の御使いとし（後書き）

変な言い回しや誤字・脱字等ありましたら直つてやってください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8479z/>

真・恋姫†無双～平成の世から来た者～

2011年12月27日19時55分発行